

源氏物語における語り手の言葉の英訳

緑川真知子

要旨：源氏物語には光源氏の側近くに仕えた古女房とおぼしき語り手が存在する。殆ど物語の表面にその姿を現さないが、待遇表現によってその息吹を看取できる。稀に物語の表面に顔を出して意見を述べたりすることがあり、そのような文章は古来「草子地」と呼ばれ、さまざま考究されてきた。

源氏物語には主立った英訳が訳5種類ある。英訳において、「草子地」はどのように翻訳されているだろうか。

語り手の存在を感じることは源氏物語の文体を味わうことでもある。現代では、語り手の存在は多少古風なものであろう。そのせいか、現代日本語訳の中には、語り手の存在を消し去ってしまうかのように、敬語が殆ど用いられないものもある。本稿においては、このような現代日本語訳を検証しつつ、明治時代にはじめて英語に訳され、百年以上の伝統を持つ源氏物語英訳がどのように語り手が顔を出す「草子地」と言われる文章を訳しているのかについて分析してみた。

Abstract: In *The Tale of Genji*, the narrators seem to be old ladies-in-waiting in close service to Genji. Although they rarely appear overtly in the tale, we can detect their existence through the usage of honorifics. In rare cases, the narrators may appear openly to express their opinions. From the medieval period, such passages have been called *sōshiji*. They have been the focus of much scholarly scrutiny. This paper will focus on how *sōshiji* have been translated in the major English translations of *The Tale of Genji*, the first of which appeared in the Meiji period more than a century ago.

Awareness of the presence of the narrator is an important factor in appreciating the style of *The Tale of Genji*. Yet for readers used to modern fiction, the presence of a narrator may be somewhat old-fashioned. Perhaps because of this, some modern Japanese translations of *The Tale of Genji* hardly use honorifics, largely erasing the narrator's presence. After examining two translations into modern Japanese, we analyze how *sōshiji* passages have been rendered into English.

1. 語り手

源氏物語には語り手の存在があるということはよく知られた事実であり、地の文(叙述文)において語り手が直接顔を出している文章は古来「草子地」と呼ばれてきた。このような文体において、地の文や草子地などを区別しようとする意識は、源氏物語の古注釈書が作られるようになったかなり早い時期から認められており(陣野 第一章一二)、¹戦後の研究史では「物語音読論」を巡る論を経て(玉上 一四三〜一五五、中野II一六)、近年のナラトロジー研究の隆盛期において物語学的側面からの分析による論が積み重ねられてきた(三谷一六二〜一八六)。語り手の物語への出現の在り方も様々であり、語りの分類分けもなされているし、語り手の姿も決して一様ではない。²本稿においては、そのような物語学的な興味を喚起する語り手が姿を現す文章(草子地)が英語に訳されるあり方に注目してみたい。というのも、源氏物語が現代日本語に翻訳される時に、語り手の語り口が消えてしまう、或いは現代日本語の翻訳者が意図的にそれを消してしまったり、変化させてしまっている場合があるからだ。だが、源氏物語は語りの文体をじっくりと味わい感じる文学でもある。それによって平安時代の空気感、様子、匂いなどを感取できる側面があるからである。現代日本語訳の中でそれらが消失してしまっている場合は、文学の愉しみのひとつが欠けてしまっているということにもなる。それで

は例えばこれが英語になり、日本を越えて行くときに、この語り手の口調は、どのように翻訳され得るのであるか。主な英訳が三種類、抄訳が二種類もある源氏物語においては、それぞれの英訳者はどのように訳しているのかを、幾つかの例を取って検証してみる。³

源氏物語の語り手はかつて光源氏の側近く仕えていた年老いた女房(古御達)が昔を思い出して語っていると、おおよそはみなされているし、そう考えておいて大きな間違いはないであろう。その語り手は全知の視点を持つとか、また必ずしもそうではないという論など、様々あるが、複数の語り手の存在が想定されていると考えられる。物語学的に分析すると、源氏物語の語り手は *overt* (物語の表面に姿を現している語り手) でも *covert* (物語の表面には一切姿を現さない語り手) でもなく、多分女性だろうなどと、その程度はわかるが、完璧な姿を物語の表面に決して現しているわけではない。(John Section 1.9)⁴ また、語り手が物語の外に存在して物語を語る場合(異質物語世界的語り手)や、語り手が物語世界の中に存在して物語を語る場合(等質物語世界的語り手)などと細かく分類されるが、源氏物語の場合、その線引きは簡単ではない、語り手の女房は確かに光源氏などの世界に存在しているのであるが、物語の中ではつきりとその存在が示されることは殆ど無いからである(John Section 1.10)⁵。

日本語の古典原文において語り手の存在はまずは待遇表現、

つまり文章の敬語の存在によって感じ取る事が出来る。敬語の存在は、原文を読んでいるときに、読者をして自然と源氏物語の世界の中へとその身を滑り込ませる端緒ともなっている。しかし既述したように、現代日本語の中には意図的にこのような敬語を取り払って翻訳しているものがある。つまるところ、そのような現代語訳においては、すこし言い過ぎかもしれないが、紫式部の文体への配慮はないとすら感じてしまうのである。そのような現代語訳はあらずじをなぞるようなだけの文章となっているとさえも感じるのである。せつかちな現代人にはその方がいいのであろうか。そして、敬語というと、日本語的な敬語体系(待遇表現)が存在しない英語においては、まさに紫式部の文体への配慮など、遙か彼方の事柄となってしまうのではないだろうか。まして語り手の存在を感じ取ることなど出来ないのではないだろうか。英訳者達はこれらをどのように克服して訳しているのか、或いは訳していないのか。以下幾つかの用例を検証してみる。

2. 夕顔の巻の終わり

まず、夕顔の巻の古典原文を以下に引く。光源氏は病重く出家した自分の乳母(右腕の部下惟光の母)のお見舞いに行った庶民的な界隈でふと夕顔の花を介して知り合った(上流ではない)中の品の、後に(夕顔)と呼称される女性を見つけ、付き

合いをはじめめる。彼女を連れ出し、一夜を過ごした幾分廃墟と化している某(なにがし)の院場所の名前は明記されないが、平安の読者にはどこら辺りと、予測が付いたのかもしれない)において、夕顔は物の怪に襲われ、儂く命を落としてしまう、というのがこの巻の骨子である。物語的には様々な要素や、伏線や、ほのめかしが巧妙かつ複雑に取りこまれている。現代の読者にとって、源氏物語という作品は、長編作品であるという認識であろうが、長編的な要素は、もちろんしっかりとある中において、切り取って優れた短篇として独立させて読める巻々もあり、「夕顔」の巻はまさにそのような巻のひとつである。

十八歳、継母への恋慕に苦しむ光源氏が恋の遍歴をはじめた矢先で経験した愛する者の眼前における(死)である。繊細かつ感受性豊かに造型されており、また無常観という平安知識人的教養を身に付けた光源氏の、若き日の大きな挫折が、ほぼ完璧な構成力と美しい文体で夕顔の花という小道具を配置して綴られている。以下に引く文章は巻の最後、傷心の光源氏がひとり、死別の哀しみを歌に詠む部分であるが、その締めくくりに語り手が顔を出しているのである。既述したが源氏物語の語り手は殆どの場合顔の見えない *voice* であるが、こんな風に顔を少し出して自分の意見を述べる箇所が時々ある。まずは光源氏が歌を詠むあたりから、少し長めに古文の文章を引いておく。

けふふゆたつひなりけるもしるく、うちしぐれて、空

のけしきいとあはれなり。ながめ暮らし給て、

過ぎにしもけふ別るるもふた道に行くかた知らぬ秋

の暮かな

なほかく人知れぬことは苦しかりけり、と思し知りぬらんかし。

かやうのくだくだしきことは、あながちに隠るへ忍びたまひしもいとほしくて、みなもらしとどめたるを、「なご帝の皇子ならんからに、見ん人さへかたほならず物ほめがちなる」と、作り事めきてとりなす人ものしたまひければなん。あまりもの言ひさがなき罪避り所なく。

(池田 一―三八四―三八六)⁷

当該部の中野幸一氏の現代語訳を以下に引く、

今日はちようど立冬の日でしたが、その日らしく時雨が降って、空の様子も実にしみじみとした感じです。一日中物思いに沈んでお過ごしになって、

過ぎにしも今日別るるも二道に行く方知らぬ秋の暮

かな

(先に亡くなつてしまった人も、今日別れて行く人も、行く道は別々だが、その行方も分からないこの秋の暮の寂しさよ)

やはり、こういう人目を忍ぶ恋というのは、苦しいもの

であったのだと、つくづくお分かりになったことでしようよ。

このようなくくだくだしいお話は、君がひたすら人目に隠れ秘密になさっていらつしやつたのもお気の毒で、みな書き漏らすのをさし控えていましたのに、どうして帝の皇子様だからといって、よく知つている人までが欠点のないようにとかく褒めてばかりいるのかと、作り話じみていると取り沙汰する人がいらつしやいますので。あまりおしやべりが過ぎた罪は、何とも逃れようもないこととして。(一―二三八)

語り手の存在は、「給ふ」などの敬語によってわかるのであるが、はつきりとその顔を出しているのは、古文では「かやうのくだくだしきことは」、現代語訳では「このようなくくだくだしいお話は」から最後の部分までである。

英訳を見る前に他の現代語訳を二つほど見てみたい。最後の語り手が顔を出している部分だけを引く。まず、『イギリスはおいしい』で流行エッセイストとなつた林望訳である。

こういうくどくどとわずらわしいことは、源氏が強いて押し隠し秘密にしていたので、筆者としても書くにしのびないとは思つたのだが、どうして、帝の御子だからといって、かれこれの欠点について知つていても知らぬ

ふりをして、褒めてばかりいるのか、そんなのはいかになんでも作り話ではないかと受け取る人もあるだろうと思うが故に、敢えて書くことにしたのである。あまり口さがないおしゃべりの罪は、どうしたって、逃れる術もないことは承知ながら。(一一二四五、太字緑川)

次は角田光代訳からである。

このようなくどくどした話は、一生懸命隠している光君も気の毒なことであるし、みな書き記すのを差し控えていたのだけれど、帝の御子だからといって、欠点を知っている人までが完全無欠のように褒め称えてばかりいたら、作り話に違いないと決めつける人もいるでしょう。だからあえて書いたのです。あんまりつつしみなくべらべらしゃべるのも、許されない罪だとはわかっていますけれどね。(一一二五八ページ中の一四六ページ)。

中野現代語訳と比べると良くわかるが、二人の現代日本語訳者共に、光源氏に対する敬語は使われていないし、その他の敬語も使われていない。特に興味深いのは林望訳では、太字にしたが、「筆者としても」と書いている点である。また付け加えておくなら、古文にも「みな」とあり、物語の伝達者は数多く

いたというニュアンスになっているが、林訳では、それは抜けている。中野訳と比べると、林／角田訳ともに、敬語が無いことは、読みやすいとも言えるが、何かが失われていると思われる。抽象的にしか表現出来ないが、文体の色合いとか文章の上に掛かるもう一枚の薄絹のヴェールなど様のものが欠けていると感じられる。もちろん、林訳には林訳的な文体があり、角田訳は現代的な殺伐感そのままの文体であり、あらずじよりは、無論もつと詳しいのであるが、先にも書いたように、あらずじを読まされているという気分になってしまう。文学とは何か、という根源的なことを考えさせられる。あるいは、こういうものが現代の文学なのだとも言えるのであろうか。

このように文学とは何かという疑問が湧くと同時に、同じ言語の中においてさえ、一千年の時を越えるだけで、翻訳者によってかくまで文学性が変質する現実を見せられる気もする。源氏物語が、世界文学として越境していくときに、もちろん翻訳で伝えられて行くわけであるが、文学性は何処まで保持されながら越境するのだろうか。そういうことを念頭に、以下当該「夕顔」の巻の英訳を検証してみる。英訳も「かやうのくだくだしきことは」に相当する部分から引いておく。

まずは文学の香り高いとされるウエイリー訳である。

I should indeed be very loath to recount in all their detail matters which he took so much trouble to conceal, did

not know that if you found I had omitted anything, you would at once ask why, just because he was supposed to be an Emperor's son, I must needs put a favourable showing on his conduct by leaving out all his indiscretions; and you would soon be saying that this was no history but a mere made-up tale designed to influence the judgment of posterity. As it is I shall be called a scandalmonger; but that I cannot help. (八〇)⁹

太字にしたが、語り手の一人称主語が何の衒いもなく使用されている。

次に戦後七〇年代の翻訳である、サイデンステッカー訳である。

I had hoped, out of deference to him, to conceal these difficult matters; but I have been accused of romancing, of pretending that because he was the son of an emperor he had no faults. Now, perhaps, I shall be accused of having revealed too much. (八三)¹⁰

同じ部分の翻訳がウエイリーとサイデンステッカーではほぼ倍の分量の差がある。サイデンステッカーも、一人称主語である。

そして二〇〇〇年代の様々な画期的とも言えるタイラー訳は以下のとおりである。

I had passed over Genji's trials and tribulations in silence, out of respect for his determined efforts to conceal them, and I have written of them now only because certain lords and ladies criticized my story for resembling fiction, wishing to know why even those who knew Genji best should have thought him perfect, just because he was an Emperor's son. No doubt I must now beg everyone's indulgence for my effrontery in painting so wicked a portrait of him. (Tyler 九〇)

これも一人称主語である。

最後はもっとも新しいワッシュバーン訳を引く。これも一人称主語である。

Up to this point I had refrained from exposing all his messy, sordid affairs, which he tried so hard to keep hidden from prying eyes. I did so in part because felt sorry for him, but then people started criticizing me, saying that my account was just so much fiction and asking me, "Is it because he is the child of an Emperor that people like you, who know him, feel compelled to sing his praises as if he were perfect in every

way?" Well, now I suppose that by exposing his sins I will be censured for having said too much, or for being spiteful. (九二)

言うまでもないであろうが、語り手はつきりと顔を出しているのに、当該部分の英訳における一人称主語は避けることは難しい。現代日本語では何とか使用せずに翻訳できるが、林訳のように「筆者としても」と書かざるを得ない感覚が存在するのは理解できるのではないか。既述のように英語には日本語におけるような敬語体系は存在しない、英語は目上の人間について、you/he/sheというような人稱を使う。これだけでも日本語母語者にとっては、無闇に直截的な表現だと思われる。目上の人間に対してもyouという人稱を使う英語なのではあるが、それを持って英語には敬語がないなどと即断するのは、はやとちりである。今詳しくは触れないが、英語の敬称は実は案外複雑である。敬称の文化的な差違があると見えるし、英語における丁寧語や尊敬語的な表現は実はもっと別なところにあるとも言えよう(緑川二〇〇三)。つまり英語においては日本語の待遇表現的なニュアンスは別な形で表される。例えば、林/角田訳ではそれぞれ「源氏が強いて押し隠し秘密にしていたので」とか「一生懸命隠している光君」と、特別源氏の身分に配慮した文章ではない。敢えて言えば角田訳の「光君」の「君」は目上の人間への呼称とは言えるだろうか。一方英訳における表現は意外に多彩である。紙幅の関係上、詳細を見ていくことは

省くが語彙や表現に工夫が凝らされている。一番短く簡潔を旨としたサイデンスティックな訳において、*out of defence to him*「彼への敬意から」と挿入している。ウェイリーは *loath* という、*hate* より強いのであろうが、会話的な言葉ではない単語を駆使しているし、タイラー訳の格調ある単語の選択と文体は言うまでもないが、やはり、*out of respect for his*……と、源氏への敬意を文章で表している。

ウェイリー訳の源氏物語を現代の日本語に翻訳し直した所謂「戻し訳」したもののひとつは、ウェイリーの当該部を以下のように訳している。貴族社会での女房達が現代社会で社会的に身分の高い人々の噂話をしたら、もちろん幾分古い趣があるが(これはそうあってしかるべきでもあろう)、さぞかしこのような口調だったのではないか、と思わせる生きた現代語訳ではないだろうか。

あの方がなんとしても秘しておきたかった恋ですから、事ごまかに縷々語るのには慎むべきだったかもしれません。でもわたくしがちよつとペンを控えたとお思になると、たちまち、みなさまはこうお尋ねになったでしょう。エンペラーの息子というだけで、なぜその不品行を語りませんの? 史実ではなくていいところばかりをお書きになって、後世の人びとをつくり話で欺こうとなさるのね、と。ですからわたくしはこのとおり書きました。それで

スキヤンダル好きと呼ばれましょうが、それも詮ないことでございます。(穂矢・森山 一一一九一)

林／角田訳が動詞で「忍びない」とか「差し控える」と使っているので、主人公光源氏への多少の敬意は読み取れるのかもしれないが、英訳の単語の選別や言葉尽くした文章とは大きな差がある。ある意味新しいワツシユバーン訳は、敢えて指摘すれば、特別な単語や言い回しがあまりないとも言えるかもしれない。仮定法の使用も少ない。文章の付け加えが多すぎるワツシユバーン訳にしては(緑川二〇二四)、ここではそれは押さえられているが、ウェイリーやタイラー訳と比べると、比較的平易な英文が並んでいる。それだけ、非英語母語者にも分かり易くなっているとも言えるのだが、日本語の敬語を英文の単語や言い回しで補おうとする意識はもしかしたら低いかもしれないと見做せる。意図的にそうしたのかもしれないが、林／角田訳は良く言えば現代的、エッセイストや作家自身の文体そのままであり、それを押し通しているのであろう。林訳には「謹訳」という言葉が冠せられている。これは紫式部への敬意を表しているのだろうか。氏の文体においては、式部の文章を現代語で再現しようという趣は見受けられない、あくまでも氏自身の社会生活範囲内の文章表現となっていると言えるのである。

3. 末摘花の終わり

源氏物語は光源氏の若き恋の苦しみが通奏低音となっており、全体に重くて暗い物語なのであるが、紫式部が人間観察においてその笑いへの観察力が劣っていたわけでは決してない。源氏物語におけるコミカルさの表れ方は、お能の演目の合間に狂言の演目が置かれるというような趣と似ているかもしれない。物語全体の中に笑いの要素があちこちに散らばって混じっているのではなく(そういう部分もちろん多少はあるが)、滑稽譚はひとつの巻や、ある程度まとまったアネクトトとして存在する。末摘花はそういう巻のひとつである。親王の娘という高貴な出自ではあるが、鼻が長いので、寒さで赤くなるころから、紅花が連想され、その古名である末摘花がこの女性の呼称となり、巻の名前ともなっている。古代的な物語の主人公である光源氏のお相手としては容姿に難があると見えるが、女房が巧みに立ち回り、容姿の欠点をあからさまにせずに、光源氏と末摘花の逢瀬を成功させるが、光源氏は雪の日の朝の光の中でその顔をしっかりと見てしまうというわけである。平安時代では男性が女性の顔をあからさまに正面からじっくり見るという機会は驚くほど少ないのである。そこに光源氏の友人でありライバルで義理の兄でもある頭中将が絡み、面白おかしい巻に仕立ててある。この巻の最後の部分で、また語り手が、今度はほんの一言だけ顔を出す。光源氏が「紅の花ぞあやなくう

とまるる梅の立ち枝はなつかしけれど」(池田 二一九三)と詠う、中野訳は「赤い花はどういうわけか好きになれない。その紅梅の伸びた枝は、親しみが持てるけれども」(二一五八)とあり、「うちうめかれ給」(池田 二一九三)と溜息をついた、と続き、そのあと最後に語り手が介入し「かかる人びとの末々いかなりけん」(池田 二一九三)、と感想めいた言葉を発する。中野訳では、「こうしたお方々の行く末は、どうおなりになったのでしょうか(二一五八)と結ばれている。この部分の英訳を見ている。

明治時代に初めて源氏物語を英語にした末松謙澄の訳では、以下のようになっている。

What will become of all these personages!

(Suematsu 一四一)

「人びと」の訳語として personages というような単語が使われているのが、やはり明治という時代を感じさせるが、最後に感嘆符を付しているのです、これが会話的な語りの文章だとはつきりとわかる工夫はなされている。

ウェイリー訳では、

We shall see in the next chapter what happened in the end to all these people. (一一二八)

と、なっており、in the next chapter としているのが、語り手が積極的に末摘花の末路などを今後扱いますよ、と宣言しているという解釈での英訳であろう。ある意味ウェイリーがかなり物語の先まで読み進んでいて、源氏物語の翻訳に取り掛かったという証左とも言えるかも知れない。ウェイリー戻し訳の姉妹訳では、この部分を以下のように訳している。

さて、この方たちはこれからどうなるのでしょうか。次の帖に進むことに致します。(穂矢・森山 一一三二)

林訳では「これからさき、さてどうなっていくのでありましょうか。乞うご期待」(二一六七)とあります。ウェイリーが読者に物語の先へと興味を抱かせたのと同じスタンスと言えるだろう。サイデンスティッカー訳は次の通り、

And what might have happened thereafter to our friends?

(一一三二)

単語 thereafter の使用には、例えばお伽噺などの、「それから皆は幸せに暮らしましたとさ」などというニュアンスが感じ取られる。タイラー訳、

I wonder what happened to all these ladies in the end.

一人称主語が使われ、また「人びと」は *ladies* と訳されている点
が、それまでの訳とは違う。ワッシュバーン訳は殆どの場合タ
イラー訳とは随分違う訳文を提供しているが、ここは、タイラ
ー訳の主語と *ladies* の訳語を承けている。

I wonder what became of all of his ladies in the end;

(Washburn 1—149)

最後に、もう一例だけ見よう。次の例は源氏物語の語り手が全
知の語り手かどうかという問題にも触れ得るのであるが、語り
手を設定するにあたって、その語り手が、例えば登場人物の心
の言葉まで知っている点について、論理的な整合性を付けなけ
ればならないという意識があったということは、はっきりと言
えよう。

3. 「花宴」における和歌の後の草子地

宮中で催された花の宴の折に、舞といい、漢詩の披講といい、
何事につけても秀でている光源氏の様子が描かれ、帝が光源氏
を大切に扱う様子などを感じながら、中宮(皇后のこと、ここ
では藤壺、光源氏の継母でありその思い人)は、光源氏へ自分

の考えが及ぶのを戒めながらも、心の中で次のような歌を詠む、
「おほかたに花の姿を見ましかば露も心のおかれまじやは」(池
田 二—二二—)、中野訳は「通りいっぺんの気持ちで花のよう
なお姿を拝見するのだしたら、つゆほどの気がねもせずに、賞
賛することができましたように」(二—二一—一六)とある。こ
のすぐ後に、語り手が次のように、姿を現している。

御心のうちなりけんこといかで漏りにけむ

(池田 二—二〇二)

中野訳は、以下の通り。

宮のお心の中で詠まれたこのお歌が、どうして世間に漏
れ出てしまったのでしょうか。(二—二一—一六)

光源氏と父桐壺帝の後妻である藤壺との不義密通の逢瀬は先立
つ「若紫」の巻においてすでに描かれ、またその密通による藤
壺の懐妊と出産も描かれている。花の宴において、見事な舞を
披露したり、漢詩文を作る光源氏の様子を知り、二人の密通関
係などがなかったとしたら、後ろめたさのない状況において、
光源氏の素晴らしい姿を見ることが出来たのなら、すがすがし
い気持ちで拝見できたのに、という心情を吐露した歌であるが、
あくまでも「心の中」で詠んだ歌なのである。だから、語り手

が顔を出して、どうして誰も知らないはずの歌が世間に漏れ出

たのであろうか、と言っているわけである。全知の語り手を装
わず、何かの拍子に心の歌まで漏れ出たのですね、と弁明して
いると言うべきであらうか。

以下また、ウエイリー訳から引いていくが、ウエイリーは和
歌を訳さないことが多いが、和歌を端折ってしまうというわけ
ではなく、散文の中に組み込んで、歌の内容を説明している場
合も多く、ここがそのような場面である。

“It is because he is fond of me; there can be no other reason,”
she decided at last, and the verse, “Were I but a common
mortal who now am gazing at the beauty of this flower,
from its sweet petals not long should I withhold the dew of
love,” framed itself on her lips, though she dared not utter it
aloud. (Waley 一四八 傍線緑川)

下線を施したが、ほそほそと口元で呟いたという三人称の一般
的な小説の叙述文体になっている。語り手は消えているわけ
である。姉妹訳は次のようになっている。

「きつとゲンジがわたしに好意をお持ちだからだわ。そ
れしか考えられない！」ついにはそう思うことにします。
そして声には出しませんが、「この花の美しさを見つめ

るわたし。そのわたしが普通の人であれば、この甘い花
びらから愛の露を受けるのを、少しでもためらったでし
ようか」(毬矢・森山一一一六三)

と、ウエイリーの和歌の散文パラフレーズを忠実に訳し、更に
ウエイリー訳にはない和歌を原典からそのまま「おおかたに花
の……」と引き、ウエイリー訳の傍線部を次のように訳してい
る。

と、一人秘かに、唇にのせるのでした。

(毬矢・森山一一一六四)

ウエイリー訳を日本語に訳し戻しているわけであるから、語り
手の姿はやはり消えている。が、これは当然であろう。

次は、サイデンステッカー訳である、

She recited it silently to herself. How then did it go the
rounds and presently reach me? (一一五二)

とても上手い訳となっているのではないだろうか。藤壺の歌が
「どうめぐって、ほどなく私のもとへと辿り着いたでしょうか」
というような面持ちの訳である。タイラー、

she murmured. One wonders how anyone could have passed on words meant only for herself. (一五六)

oneという主語を使うのは少しハイソなイメージであろうか。このような小さなことでも、語り手である古御達の属する社会の雰囲気伝えることは重要である。

ワッシュバーン、

Since Fujitsubo composed this privately, I wonder how it came to be known to the court? (一七三)

どうやってこの歌が宮中に広まったのでしょうか、というような訳しかたである。宮中の多くの者が知り、よって語り手の自分の耳にまで届いたということであろう。それぞれの英訳には漏れ出る範囲や雰囲気の違いが見受けられる。

ワッシュバーンは藤壺がこの歌を *privately* (秘か) に詠んだ、と訳している他は、サイデンスティックカー、タイラー共に、何らかの形で藤壺がこの歌を口にした、*reited* とか *murmured* とし、ウエイリーは歌は訳さず、歌にしようとした藤壺の気持ち、はつきりと声に出したわけではないが、唇から漏れ出たぐらいの意味合いで訳しているのだろう。

4. 終わりに

語り手が顔を出す物語の在り方は、おそらく現代小説においては、幾分古くさいのかもしれない。そういう点において、林／角田訳では、そういうところをそぎ落としているのかもしれない。より現代の読者が抵抗なく読めるように、ということか、或いは、現代の翻訳者自身もその方が身近に感じるのであろう。明治の与謝野晶子訳もさほど敬語に留意していない。だが、与謝野晶子があまり敬語を使わなかったのは、時代的、女性学的な観点によるまた別な考察が必要だと感じるので、林／角田訳とは分けて考察すべき事柄のように思われる。

一方、英訳者達は、案外、語り手介入の言葉や、特に日本語的な敬語体系を持たない故に、待遇意識表現の英訳での表現に腐心していると言っても良いと思われる。日本的な敬語によって、語り手の存在を読者に感得させることは出来ないもので、使用する単語や文章、そして文体の雰囲気によって宮中の女房の語り口や待遇意識表現を再現しようとしていると考察できる。

源氏物語は語りの文学であり、その語り口があるからこそ、宮中の雰囲気より身近に読者に迫ってくる。全体としては三人称小説的な体裁ではあるが、語り手が顔を出す場面では英語ではつきりと一人称主語が使われる。その個人の口調、その人が語る昔語り、その枠組みがあることによって、現代人でさへ

比較的 naturally 宮廷世界へとスリップしていくことが出来るのだと思われる。その世界で読書の羽を広げることこそが、源氏物語を読む愉しみであり、世界文学として英語で読む人びとも、英訳者による語り英訳の工夫によって、非日常の世界へと入り込んでいけるのではないであろうか。そうでなければ、くりかえしになるが、ただ丁寧なあらすじを読まされている気分になつてしまふ。

註

1 陣野氏は『花鳥余情』や『河海抄』といった代表的な源氏物語の古注釈書の辺りから本文区分を意識した注記が見られるようになってくることを丁寧¹に考察している。

2 代表的な論文として、他には甲斐陸郎『源氏物語の文章と表現』、桜楓社、一九八〇年、高橋亨『源氏物語の詩学——かな物語の生成と心的遠近法』、名古屋大学出版会、二〇〇七、東原伸明『物語文学史の論理——語り・言説・引用』、新典社、二〇〇一年など、欧米の物語学を応用しての語り手論が数多く出ている。

3 英訳についての書誌情報は、参考文献の覧を参照して頂きたいが、本稿では引用していない英訳(抄訳)に、以下のものがある。Helen C. McCullough, *Genji & Heike: Selections from The Tale of Genji and The Tale of the Heike*. Stanford: Stanford University Press, 1994.

4 定義は、ジェラルド・プリンス著、遠藤健一訳、『物語論辞典』、松橋社、一九九一年、covert narrator, overt narratorの項目を参照。

5 右に同じく定義は『物語論辞典』heterodiegetic narrator, homodiegetic narratorの項目を参照。

6 明治期から大正にかけての古い与謝野晶子訳は敬語が少ない点は特筆に値するが、それ以後の谷崎潤一郎訳や田地主子訳、などは敬語を用いた現代語訳となっている。また新しくは、瀬戸内寂聴訳、大塚ひかり訳なども敬語は用いている。

● 与謝野晶子訳『新訳源氏物語』(正確には『物語』の語は「ものがたり」と平仮名になっている)、金尾文淵堂、一九二二年(明治四五年)〜一九一三年(大正二年)、与謝野晶子全訳『全訳源氏物語』角川文庫、一九七一年、改版初版、本書の初版は金尾文淵堂、一九三八年〜一九三九年。全訳の文庫本は、角川文庫、一九七二年。

● 谷崎潤一郎訳『新々訳源氏物語』中央公論社、一九六四年〜六五年。

● 田地主子訳『源氏物語』新潮社、一九七二年〜七三年。

● 瀬戸内寂聴訳『源氏物語』講談社、一九九六年〜九八年。

● 大塚ひかり訳『源氏物語』ちくま文庫、二〇〇八年。

7 源氏物語の古典原文は『池田本 源氏物語』に拠る。わたしに句読点をほどこし、適宜仮名を漢字にし、仮名遣いを変更し、鉤括弧を施したところがある。

8 Kindle版に記されているページ番号を記した。

9 ウェイリー訳初版は以下の通り。Arthur Waley, *The Tale of Genji by Lady Murasaki*, 6 vols. (London: George Allen & Unwin, 1925-1933.

- 10 サイデンスティック初版は以下の通り。Edward G. Seidensticker, *The Tale of Genji*, 2 vols. New York: Alfred A. Knopf, 1976.
- 11 末松謙澄訳の初版は「Suyematzu Kenchio, *Genji Monogatari: The Most Celebrated of the Classical Japanese Romances*. London: Tübingen, 1882. 訳者名のローマ字表記が「ボン式ローマ字」が普及する以前のものであるし、またローマ字で源氏物語とした後に付けたタイトルは興味をさそえる。物語を romances としている。

参考文献

- 角田光代訳『源氏物語』、河出文庫、古典新訳コレクション、Kindle版、二〇一三年。
- ジェラルド・プリンス著、遠藤健一訳、『物語論辞典』、松柏社、一九九一年
- 陣野英則『源氏物語の話しと表現世界』勉誠出版、二〇〇四年。
- 玉上琢弥『源氏物語評釈 別巻1』、角川書店、一九六六年
- 天理図書館『新天理図書館善本叢書』池田本『源氏物語』、八木書店、二〇一六年。
- 中野幸一『物語文学論攷』、教育出版センター、一九七一年。
- 林望『イギリスはおいしい』、文春文庫、一九九五年。
- 林望訳『謹訳源氏物語』、祥伝社、二〇一〇年。
- 穂矢まりえ・森山恵姉妹訳『紫式部 源氏物語 A・ウェイリー版』、左右社、二〇一七年。
- 三谷邦明『源氏物語における〈語り〉の構造——〈話者〉と〈語り

手〉あるいは『草子地』論批判のための序章——』、『物語文学の方法1』所収、有精堂、一九八九年。

緑川真知子『解釈と注釈そして文学としてあること』の狭間で

——源氏物語英訳における文学的美意識——』、川村裕子編

『平安朝の文学と文化 紫式部とその時代』所収、二〇二四年。

与謝野晶子訳『新訳源氏ものがたり』、金尾文淵堂、一九二三年

〜一九一三年

与謝野晶子全訳『全訳源氏物語』角川文庫、一九七一年、改版

初版、本書の初版は金尾文淵堂、一九三八年〜一九三九年。

全訳の文庫本は、角川文庫、一九七一年。

Jahn, Manfred. "Narratology: A Guide to the Theory of Narrative." English Department, University of Cologne, 2017. Sections 1.9

- 1.10.

Midorikawa, Machiko. "Coming to Terms with the Alien: Translations of *Genji Monogatari*, *Monmuwa Nipponica*, Vol. 58, No. 2 (Summer, 2003), pp. 193-222.

McCullough, Helen Craig *Genji & Heike: Selections from The Tale of Genji and The Tale of the Heike*. Stanford: Stanford University Press, 1994.

Seidensticker, Edward G. *The Tale of Genji*, 2 vols. Tokyo: Charles E. Tuttle, 1978.

Suematsu Kenchō. *The Tale of Genji*, translated by Suematsu Kenchō. Tokyo: Charles E. Tuttle, 1974.

Tyler, Royall. *The Tale of Genji*, 2 vols. New York: Viking, 2001.

Waley, Arthur. *The Tale of Genji*. Tokyo: Charles E. Tuttle, 1970.

Washburn, Dennis. *The Tale of Genji*. New York: W. W. Norton, 2015.